

# うつ病院に行くと殺される?

医療の暗部を抉る集中連載

伊藤隼也 と本誌取材班

第4回

本誌前号既報の「子供への向精神薬処方」が国会で炸裂!

## 製薬会社から精神医療界の大物に流れた「講演料」、「原稿監修料」

あまりに危険な事態が水面下で進行している。

前回報じた通り、多くの問題が指摘された抗うつ薬SSRIについて、日本では18歳未満を対象にした治験が行なわれていた。薬害問題に詳しい市民団体「薬害オンラインバースン会議」の水口真寿美弁護士が解説する。

「SSRIの一つバキシルについて、製造元の英グラクソ・スミスクライン(GSK)社が09年6月から日本で7歳から17歳の子供を対象とした臨床試験を行いました」

バキシルは英国では、18歳未満のうつ病に対して有効性がなく、むしろ薬の副作用で自殺衝動が亢進されると報告する意向を表明した。

「薬をきちんと飲めば治る、と多くの患者は信じているが、これらの裁判はそれを根柢から覆す内容だ。」

製薬会社と医者が

病気を作っている?

なぜこんな事態が起こるのか。精神医療の闇を探るには製薬会社のマーケティングに触れなければならぬ。

前回既報通り、精神科治療の「教科書」である「精神疾患の診断統計マニアル」(DSM)の改訂版作成に関わった医師170名のうち95名が製薬会社との間に金銭的なつながりを持っていたことが米国での研究で明らかになつてきている。

さらに、フィラデルフィア・インクワイヤ紙が09年8月20日にスクバ抜いたGSK社の内部資料によると、同社はバキシル販売促進のため「コーストライティングプログラム」を採用した。

同紙によれば、まずはGSK社が適当な医師にアプローチし、バキシルが良好な処方結果をもたらした経験についての論文作成を持ちかける。その上でトピックをどう展開してどう結論づけるかまでGSK社が援助して論文が完

成されて大騒動になり、03年に18歳未満への処方が禁止となつた。その後、自殺衝動の亢進は抗うつ剤全般の問題ではない。現に日本でも医薬品添付文書の警戒欄に「18歳未満への投与は慎重に」と記載されている。

にもかかわらず、あえて子供を対象にした臨床試験をする姿勢はあったのだろうか。本誌の取材にGSK社はこう回答した。

「バキシル錠をはじめ、選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)の児童・青年期の大うつ病性障害(MDD)に対する検討は、海外においても

十分に行なわれているとはいえない。

一方、国内の児童・青年期の精神医療の現場における向精神薬での治療は大半が過店外使用されているという現状があります。これらの治療薬を見童・青年期の患者に対して適正に使用するためにも国内で臨床試験を実施することにより、治療薬の有効性および安全性に関するエビデンスを確立することが必要であり、当該試験の結果は、最終的に児童・青年期の患者に対する治療に際して、医師が判断する一助になると考えた」(GSK広報部)

なお、その後、治験への参加登録が進まなかつたため、2010年11月30日に本試験の継続を断念したという。

バキシルは過去にアメリカで大問題に発展した。

GSK社はバキシルが10代の自殺の現象における向精神薬での治療は大半が過店外使用されているという現状があります。これらの治療薬を見童・青年期の患者に対して適正に使用するためにも国内で臨床試験を実施することにより、治療薬の有効性および安全性に関するエビデンスを確立することが必要であり、当該試験の結果は、最終的に児童・青年期の患者に対する治療に際して、医師が判断する一助になると考えた」(GSK広報部)

なお、その後、治験への参加登録が進まなかつたため、2010年11月30日に本試験の継続を断念したという。

また、近年はSSRIと胎児性障害との関連も指摘される。

米国ベンシルバニア州では妊娠中にバキシルを服用したことで子供が先天性的心臓疾患を持つて生まれたとする女性がGSK社を提訴。ブルームバーグが09年10月13日に報じたところによれば、陪審はバキシルが胎児性障害を

すんな診療、安易な向精神薬の処方を行なう医師。多剤大量処方という日本の精神医療の悪弊。そして小児への向精神薬の投与。これまで3回にわたつて日本問題に関する特別委員会でこの問題が取り上げられ、大きな波紋を呼んでいる。第4回では、日本の精神医療界のトップたちと、製薬メーカーの「不適切な関係」についてメスを入れる。



うつ病院に行くと殺される? ②

本誌前号既報の「子供への向精神薬処方」が国会で炸裂!

第4回

本誌前号既報の「子供への向精神薬処方」が国会で炸裂!

十分に行なわれているとはいえない。

一方、国内の児童・青年期の精神医療の現象における向精神薬での治療は大半が過店外使用されているという現状があります。これらの治療薬を見童・青年期の患者に対して適正に使用するためにも国内で臨床試験を実施することにより、治療薬の有効性および安全性に関するエビデンスを確立することが必要であり、当該試験の結果は、最終的に児童・青年期の患者に対する治療に際して、医師が判断する一助になると考えた」(GSK広報部)

なお、その後、治験への参加登録が進まなかつたため、2010年11月30日に本試験の継続を断念したという。

バキシルは過去にアメリカで大問題に発展した。

GSK社はバキシルが10代の自殺の現象における向精神薬での治療は大半が過店外使用されているという現状があります。これらの治療薬を見童・青年期の患者に対して適正に使用するためにも国内で臨床試験を実施することにより、治療薬の有効性および安全性に関するエビデンスを確立することが必要であり、当該試験の結果は、最終的に児童・青年期の患者に対する治療に際して、医師が判断する一助になると考えた」(GSK広報部)

なお、その後、治験への参加登録が進まなかつたため、2010年11月30日に本試験の継続を断念したという。

また、近年はSSRIと胎児性障害との関連も指摘される。

米国ベンシルバニア州では妊娠中にバキシルを服用したことで子供が先天性的心臓疾患を持つて生まれたとする女性がGSK社を提訴。ブルームバーグが09年10月13日に報じたところによれば、陪審はバキシルが胎児性障害を

## 国立精神・神経医療研究センター理事長の樋口輝彦氏の贈与等報告 〔市民の人権擁護の会〕による情報公開及びそのまとめ〕

支払日	内容	支払いをした事業者など	金額(円)
H22.5.13	北海道リワーグ精神会議第3回講演会「うつ病診断の入り口と出口～早期診断と社会復帰を中心に」演者第25回精神疾患心身医療研究会「うつ病診断の問題点と臨床指導の必要性」	明治製薬株式会社	60,000
H22.5.20	CNS Symposium 2010「精神障害から健康癒へアプロード」講演会長	明治製薬株式会社	40,000
H22.6.4	第2回多難性障害性うつ病研究会「難治性うつ病の難解」講演	うつ病発達研究会 ファイザー株式会社 多難性障害性うつ病研究会	40,000 40,000 40,000
H22.6.23	第1回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会 ランチセミナー「認知症」「精神科医・心療内科医のことば～働く人のこころのトーク」「勤労者～うつ病家族の視点から～」テーマ下の群材	ファイザー株式会社	40,000
H22.6.30	「精神科医・心療内科医のことば～働く人のこころのトーク」「勤労者～うつ病家族の視点から～」テーマ下の群材	日本製薬新聞社 ファイザー株式会社	65,665
H22.7.23	Mayoウツ不安障害治療フォーラム バニルディスカッショントピック	明治製薬株式会社	111,111
H22.8.25	精神科エキスパートフォーラム 「抗うつ薬の併用療法を考える」講演	シェリング・プラウ株式会社	111,111
H22.8.31	ランクタール双極性障害アドバイザリーミーティング 講習・資料・報酬費用	グラクソ・スミスクライン株式会社	100,000
H22.9.15	パニック障害セミナー 2010 「パニック障害の診断と治療について」講演	グラクソ・スミスクライン株式会社	40,000
H22.9.24	鳥取県南部うつ病研究会「うつ病の薬物治療 新規抗うつ薬の期待」講演	シエリング・プラウ株式会社 万有製薬株式会社	111,111 44,444
H22.10.8	第3回日本生物学的精神性医学セミナー座長	旭化成ファーマ株式会社	70,000
H22.10.29	今後の精神科医療を語る会講演会 廉長	大日本住友製薬株式会社	80,000
H22.11.10	第8回JANDA研究会「うつ病の背景に併存するSADの可逆性を考える」座長	グラクソ・スミスクライン株式会社	80,000
H22.11.15	Lundbeck Magazine 2011に係る取材及び写真撮影「第9回Bipolar Disorder 研究会」双極性障害の治療向上的ため、最新の臨床実践を行なう(座長・世界人間)	ルンドベック・ジャパン株式会社	120,000
H22.11.20	向上的ため、最新の臨床実践を行なう(座長・世界人間)	旭化成ファーマ株式会社	40,000
H22.11.29	西日本地区医師会年次学術講演会「自殺予防対策推進の為に～うつ病の診断と治療～解説へのメッセージ」講演	ファイザー株式会社 西日本地区医師会	111,111
H22.11.30	TOKYO CNS Symposium 双極性障害の最新情報の提供及び適正使用情報の提供 講演	日本イーライリリー株式会社	44,444
H22.12.3	デジマード主要新聞社4社ジャーナリストによる取材 日本における精神科治療の現状と今後の展望	ルンドベック・ジャパン株式会社	40,000
H22.12.3	Zyprexa 学術講演会 双極性障害の最新情報の提供及び適正使用情報の提供 講演	日本イーライリリー株式会社	44,444
H22.12.10	札幌精神医療研究会「なぜ、治療困難なうつ病はうまくいかないのか?」講演	MSD株式会社 札幌精神医療研究会	111,111
H22.12.11	九州フェロモチセミナー講演会「広がる認知症 新しいSNRIからうつ病などのように向きあうか(各選)」講演	福岡精神科医会セミナーハウス 福岡精神科医会	111,111
H22.12.13	「抗うつ薬の臨床試験の成功に向けて」研究会への出席費	ファイサー株式会社	111,111
H22.12.24	双極性障害アドバイザリーミーティング「双極性障害の薬物療法に関する心地良」講習	グラクソ・スミスクライン株式会社	80,000
H22.12.26	「第2回認知症うつ病フォーラム」「うつ病の診断と治療～その現状と展望～」	MSD株式会社・茨城精神医学講習会・日本精神神経科診療会議会茨城支部	111,111
H23.1.7	第5回うつ病標準化セミナー記録集「原稿の校査及び監修」	ファイサー株式会社	33,333
H23.1.7	SCH900274 離言相試験 中間結果会 命合失調症のエビデンスについて 講師	MSD株式会社	111,111
H23.1.29	イングリッシュ版新規記念講演会 本邦初の双極性障害新規抗精神病薬への期待～PET所見を中心に～ 座長	ヤンセンファーマ株式会社	111,111
H23.2.4	「現在のうつ病に対する課題に関するビデオ」取材なしで原稿の校査	ファイサー株式会社	111,111
H23.2.5	「アリビラーソル・補助療法の大うつ病性障害に対する試験」中間報告会 特別講演での座長	大塚製薬株式会社	60,666
H23.2.7	第1回日本産業ストレス学会 ランチョンセミナー「接続するうつ病、広がるうつ病、求められる看板的新規抗精神病薬」講師	グラクソ・スミスクライン株式会社 第12回 日本産業ストレス学会	40,000 111,111
H23.2.10	慢性疼痛治療教育プログラムに関するアドバイザリーミーティング討議への参加	ヤンセンファーマ株式会社	111,111
H23.2.10	慢性疼痛治療教育プログラムに関する資料監修	ヤンセンファーマ株式会社	111,111
H23.2.18	「デイカルトリビューン」「うつ病の診断と治療」取材など	ファイサー株式会社	111,111
H23.2.25	心理教育・家族教育ストレート第14回研究集会「わが国のうつ病対策」講演	心理教育・家族教育ネットワーク第14回研究集会 大塚製薬株式会社	100,000
H23.3.16	イーライリリー精神科メディアフォーラム「報道関係者への精神疾患・治療に関する適正な情報提供」	日本イーライリリー株式会社	77,777
H23.4.11	「うつ病のメカニズム」などの取材	日本経済新聞社／ファイサー株式会社	111,111
H23.5.13	慢性疼痛治療教育プログラムに関する資料監修	ヤンセンファーマ株式会社	111,111
H23.5.26	第26回 社団法人大阪精神科医診療所協会総会・学術研究会特別講演	旭化成ファーマ株式会社	111,111
H23.5.31	第33回日本生物学的精神性医学年会 共催セミナー「双極性障害の生物学的研究～最近の進歩～」座長	グラクソ・スミスクライン株式会社 日本生物学的精神性医学年会	60,000
H23.6.20	FG1678 Advisory Board Meeting 会議への出席	ヰルセカ ファルマ株式会社	111,111
H23.6.22	インタビュー動画「SSRI/SNRIを中心とした抗うつ薬の適正使用に関する提携」の基本的な考え方	ヰルセカ ファルマ株式会社	111,111
H23.6.29	CNS学術講演会における座長	日本イーライリリー株式会社	111,111
H23.6.29	うつと不安の情報誌D-Plus 開拓報刊号 発刊にあたってのご挨拶	ファイサー株式会社	30,000
H23.6.30	精神医療のための会議会「うつ病と自己について」講師	グラクソ・スミスクライン株式会社	100,000
		合計	3,708,883円

寺研究センター理事長の樋口輝彦氏だ。同氏は内閣府自殺対策推進会議の座長も務める、いわば日本の自殺対策のトープであり、うつ病の早期発見と早期治療を貫して訴えている。

同じく前に出た「市民の人権擁護の会」による情報公開及びそのまとめが行なった情報公開請求によって判明したのは、樋口氏が10年5月から11年6月末までのわずか1年あまりの間に

6月末までのわずか1年あまりの間に、製薬会社などから講演の謝礼や原稿の監修などの名目で合計370万円超の金額を受け取っていた事実だ。ちなみに昨年の樋口氏の理事長としての報酬

は約1839万円にも達する。

確かに個々の謝礼は講演や監修そのものに対する謝礼として支払われている。しかし、責任ある立場であり、その発言や論文に影響力がある医師が、直接の利害関係がある製薬会社から多くの金銭を得ている事実は看過できない。李トに冠を止さず、である。

本誌の取材に樋口氏はこう答えた。

「当センターの役職員倫理規程に基づき承認されている医療関係者を主な対象にした学術的な内容の講演などであり、問題ないと考えていました」

10月25日、衆議院の青少年問題に関する特別委員会で、小児への向精神薬の投与について問題視した、民主党の三宅雪子議員はこう言う。

「私自身は、政治家だった祖父から、直接の利害関係者とは距離を置くよう指示を受けている。独立行政法人国立精神・神経医療研究センターの立場で、座長という公の立場で、300万円を超える謝金を利害関係者である製薬会社から受け取ることは世間の常識とすら思っている。他の医師や学者の信頼性を損なう話で残念だ」

差し迫る問題を政治はどう考えるか。10月25日、衆議院の青少年問題に関する特別委員会で、小児への向精神薬の投与について問題視した、民主党の三宅雪子議員はこう言う。

「私は、政治家だった祖父から、直接の利害関係者とは距離を置くよう指示を受けている。独立行政法人国立精神・神経医療研究センターの立場で、座長という公の立場で、300万円を超える謝金を利害関係者である製薬会社から受け取ることは世間の常識とすら思っている。他の医師や学者の信頼性を損なう話で残念だ」

前回と同様の法律が求められる。

ビーダーマン博士騒動などで揺れた米国では10年3月、すべての製薬会社と医療機器会社を対象に医師や病院に超えることを課す「サンシャイン法」が成立し、13年から施行される。日本でも同様の法律が求められる。

ビーダーマン博士騒動などで揺れた米国では10年3月、すべての製薬会社と医療機器会社を対象に医師や病院に超えることを課す「サンシャイン法」が成立し、13年から施行される。日本でも同様の法律が求められる。